

植民地朝鮮における「内地」教育：初等学校「修身科」を中心に

山下, 達也
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7376520>

出版情報：国際教育文化研究. 9, pp.113-124, 2009-07-07. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



植民地朝鮮における「内地」教育

—初等学校「修身科」を中心に—

山下 達也

はじめに

本稿は、植民地朝鮮における初等学校「修身科」（以下、修身）の内容を検討することにより、朝鮮における「内地」イメージの形成過程についていくつかの知見を得ることを目的としている。

植民地朝鮮における初等教育の制度および内容は、日本「内地」に準ずるかたちで編成・改変されたとはいえ、「朝鮮教育令」（第三条）に規定されているようにあくまで「時勢ト民度ニ適合」した、朝鮮独自の色彩を帯びたものであった。この「時勢ト民度ニ適合」という方針の下、朝鮮人の修業年限、学習内容などが「内地人」のそれと差別化されていたことは周知のとおりであるが、本稿で着目する「内地」に関する教育（内容）は、それ自体の存在が、いわゆる「外地」という朝鮮の位置づけと事情とを勘案して行なわれたものであったといえる。帝国日本の「中心」たる「内地」に関するイメージが、「周縁」としての「外地」でどのように形成され、維持されていたかという問題は、植民地政策の戦略と完全に切り離して論じることにはできない。つまりこの点について問うことは、教育を通じた日本の植民地経営の実態を明らかにするうえでも重要な作業となる。

「内地」に関するイメージの形成や態度の育成を初等教育段階に着目しつつ論じた先行研究としては、磯田一雄の『「皇国のすがた」を追って』がある。磯田は、初等学校で用いられた「皇国史観」に基づく国史教科書の分析を通して、歴史教育が朝鮮人児童に日本への隷属の必然性を印象づける過程を明らかにしており、その成果は本稿にとって示唆に富むものである⁽¹⁾。ただ、小沢有作が指摘するように、朝鮮における歴史教育では、「日韓併合」や「内鮮一体」の歴史的必然性を説明することに力点が置かれており、天皇制モラルの理解や受容を中心とする日本への「同化」は、修身での「内地」に関する学習を通して図られたとあってよい⁽²⁾。勿論、「同化」という植民地教育のひとつの象徴的な理念が各教科、あるいは教科外活動の全体に通底していたことも看過できないが、児童が「内地」の何を知り、それをどう理解して位置づけるかという過程について検討するうえでは、まず修身教育に着目する必要がある。

そこで本稿では、初等学校の中でも修身における「内地」学習に主眼を置き、以下の2点について論じることとする。

第一に、初等学校における修身の理念や位置づけおよびその変遷について検討し、初等学校における修身教育の特徴・意義を明らかにする。第二に、朝鮮における修身教育で実際に使用された教科書を分析することによって、具体的な「内地」教育の内容と、学校における「内地」イメージ形成過程の実態について新たな知見を得たい。

なお、本稿で対象とするのは、おもに朝鮮人初等教育における修身である。ただし、1938年度以降は、朝鮮人初等教育と「内地人」初等教育が制度的に統一されたため、一部は両者にまたがる内容となっている。

1. 初等学校における修身の位置づけとその変遷

植民地朝鮮における修身は、1910～1940年度までは教科として、1941年度以降は国民科の1科目として、植民地期を通じて存在し続けた⁽³⁾。そこでまず、初等学校における修身の教科としての位置づけや理念を明らかにし、それが時局の影響を受けながらどう変化したかということ明らかにしたい。

1911年、「朝鮮教育令」とともに施行された「普通学校規則」(朝鮮総督府令第百十号)では、普通学校における修身の理念や内容について以下のように記されている。

修身ハ教育ニ関スル勅語ノ趣旨ニ基キ道德上ノ思想及情操ヲ養成シ旧来ノ良風美俗ヲ失ハサラムコトニ注意シ実践躬行ヲ勸奨スルコトヲ要旨トス

修身ハ近易適切ナル事項ヨリ始メテ人倫道德ノ要旨ヲ授ケ漸ク進ミテハ国家及社会ニ対スル責務ヲ知ラシメ国法ニ遵ヒ公德ヲ尚ヒ公益ニ力ヲ尽スノ気風ヲ助成シ兼テ普通ノ礼儀作法ノ一斑ヲ授クヘシ⁽⁴⁾

こうした根本的な理念や方向性は、特に「内地」の修身教育と異なるものではない。しかし、修身の中に含まれる教育内容の編成には、朝鮮の独自性があった。植民地期初期の修身教科書の編纂に携わった長根禅提は、普通学校における修身教科書の内容について次のように述べている。

「清潔」の課を設けたのは、清潔の習慣を養成するやうにすることは、現下の朝鮮の児童に対しては、特にその必要を認めるのである。「お祖父さんとお祖母さん」の課を設けた理由は、尋常小学修身書巻一に於ては、「親の恩」「親を大切にせよ」「親のいひつけを守れ」の三課を設け、孝の道を示して居るが、朝鮮に於ては、一般に祖父母の同居するのが多く、これが最も普通の状態なのであるから、父母に対する心得を示すだけでは、幼者に対しても尚ほ不満足たるを免れない。そこでこの課を設けたのである。又「親切」の課を設けたのは、内鮮融和の意を寓したものであつて、朝鮮の児童が、内地人に路を教へて居るところを出したのである。⁽⁵⁾

これによると、「清潔」、「お祖父さんとお祖母さん」、「親切」は、朝鮮の事情を考慮して設けられた課であったことがわかる。実際、長根禅提が編纂に携わったと考えられる『普通学校修身書巻一』を見てみると、これらの課をすべて確認することができる。例えば、「清潔」の課には、家の掃除に勤しむ朝鮮人児童の挿絵があり⁽⁶⁾、「お祖父さんとお祖母さん」の課には、祖父

母を手伝う朝鮮人児童の姿がある⁽⁷⁾。また、「内鮮融和の意を寓した」という「親切」の課には、長根が言うように、和服姿の「内地人」男性に、朝鮮の子どもが道をおしえていると思われる絵があり、そこには、「人ガミチヲキイテイマス 子供ガシンセツニオシエテイマス。人ニハシンセツニシナケレバ ナリマセン」とある⁽⁸⁾。挿絵に多少の変化はあるが、これらの内容は、1940年代に修身が国民科の一科目となっても教科書の中に残っている。

このように朝鮮の修身教育はある一定の独自性を有し続けていたわけであるが、実際に修身の授業が行なわれていたのは、どの学年においても基本的に週一時間であった。この週一時間という授業時数については、1936年1月、忠清南道の洪城普通学校から「修身科ノ教授時数一週間ニ一時間トセラレタル理由如何」という質疑が総督府に提出されている。これに対し、朝鮮総督府編修官の鎌塚扶は次のように回答している。

朝鮮教育令第二条ニヨリ普通学校ニ於テハ常ニ又如何ナル場合ニモ「徳育ヲ施ス」ベキコトヲ忘ルベカラズ。随ツテ何レノ材料モ徳育上ノ分担ト国民タル性格ノ涵養担当セルモノナルヲ忘ルベキニアラズ。斯克考フルトキ修身科ノ教授時数ハ現在ノママニテモサシタル不足ヲ感ゼサルベシ⁽⁹⁾

この回答によれば、週に一時間という修身の授業時数は適当であるというのが総督府の見解である。しかし、実際にはその2年後の1938年以降、修身の授業時数は週二時間に増加している。この時期の「小学校規則」⁽¹⁰⁾の修身に関する規定部分には、「皇国臣民タルノ志操ヲ固クシ忠君愛国ノ志氣ヲ養フハコトヲカムヘシ」(第十七条)という文言が加わっていることからわかるように、この授業時数増加の背景には、いわゆる「皇民化教育」の強調があった。さらに1940年代に入ると、「皇民化教育」の中核として修身が重視されるようになる。以下は、総督府編修官の吉田正男による「国民科修身教科書の体系とその重点」の一部である。

凡そ皇国に生をうけたものは、皇国が万世一系の天皇、皇祖の神勅をうけて永遠に之を統治し給ふところであることを確実に把握せねばならない。これこそ一切の出発点であり、帰着点であつて、あらゆる教科・科目の窮極の狙ひは正にこのことを徹底理會せしめるにあるのであるが、特に修身は国史や国語などとともに、その中核的科目として重要な位置を占める。随つて修身教材は常に国体の精華を明らかにし、国民精神を涵養し、皇国の使命を自覺せしめ、忠君愛国の志氣を養ふに適切なるものを選んでゐるのである。⁽¹¹⁾

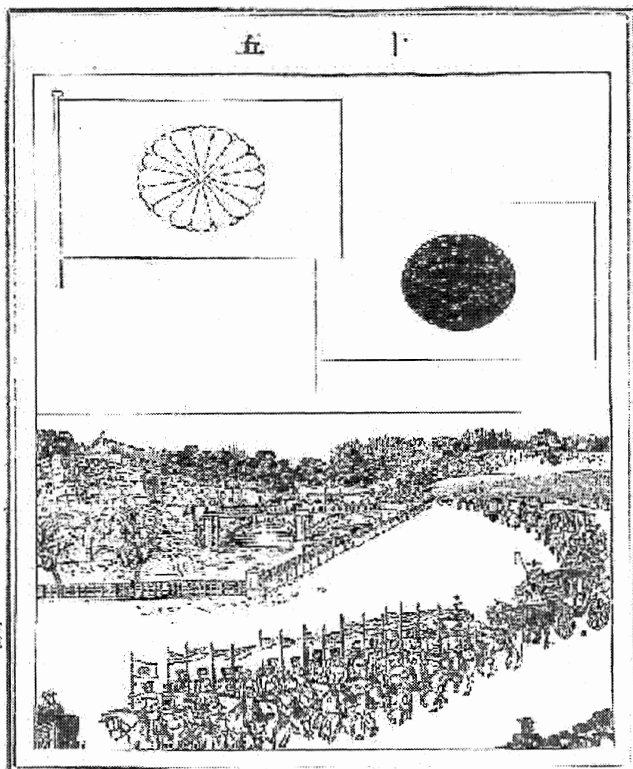
「皇民化教育」の徹底に伴い、修身の「中核的科目」としての位置づけがより顕在化し、教育内容にも「忠君愛国の志氣を養ふに適切なるもの」が特に選ばれていたということである。では、そうした修身教育の中で、「内地」あるいはそれに関わる事項はどう教えられていたのだろうか。次項では、修身のより具体的な教育内容について検討したい。

2. 修身教科書に見る「内地」教育の実態

ここでは、植民地朝鮮における修身教育で、「内地」についてどのような教育が行なわれていたのかを明らかにしたい。具体的には、植民地期に朝鮮総督府によって編纂された教科書の中で、「内地」あるいはそれを連想させるものがどのようなかたちで登場しているかに着目する。

1938年に朝鮮総督府が「修身教科書沿革考」で振り返っているように、朝鮮における修身教科書は当初から、「文部省小学修身書に準じ、之に朝鮮の特殊事情を考慮に入れて編纂したもの」⁽¹²⁾であった。その朝鮮総督府編纂修身教科書の中でもまず着目したいのは、天皇制や神話、またそれに関わる行事や人々の関わり方についてのものである。例えば、文字の習得がまだ充分でない1学年の児童に対しては、挿絵によって視覚的に天皇については、挿絵によって視覚的に天皇について学ぶ機会が設けられている。図1は、『普通学校修身書巻一』に載せられた絵である。この教科書に対応して作られた教員用の指導書、『普通学校修身書巻一教師用』によれば、このページの学習項目は「天皇陛下」であり、その目的は「天皇陛下ハ我ガ国ヲ治メ給フ、最モ尊キ、最モ有リ難キ御方ナルコトヲ教ヘ、皇室ヲ尊崇スル念ヲ養フ」⁽¹³⁾こととされている。また、この絵を児童に見せながら教員が行なう説話の内容は以下のとおりである。

図1 「天皇陛下」の課の挿絵



(出典：朝鮮総督府『普通学校修身書巻一』1922年、15頁)

コノ絵ハ天皇陛下ガ宮城カラオ出カケニナル所デゴザイマス。御馬車ノ前後ニハ、オ供ノ人々ヤ警護ノ人々が大勢居マス。一番先ニハ、前駆ガ馬ニ乗ツテ、菊ノ御紋ノツイタ御旗ヲ持ツテ進ンデ行キマス。コノ御旗ハ、天皇旗デ御座イマス。道ノ側ニ並ンデ居ル人々ハ、最敬礼ヲシテ居マス。

天皇陛下ハ我大日本帝国ヲオ治メ遊バサレ、臣民ヲ子ノヤウニアハレンデ下サイマス。我等ハ皆天皇陛下ノ御恩ニヨツテ、安穩ニ暮スコトガ出来ルノデゴザイマス。皆サンガ学校デ学ブコトノ出来ルノモ畢竟天皇陛下ガ教育ヲ重ンジタマフ大御心ニ由ルノデゴザイマス。天皇陛下ハ我々ヲオ愛シニナツテ、常ニソレゾレノ幸福ヲ図リ下サルノデゴザイマス。臣民タルモノハ、天皇陛下ノ御恩ヲ有リ難ク思ハナケレバナリマセン。

八月三十一日ノ天長節ハ天皇陛下ノオ生レニナツタ日デ、十月三十一日ノ天長節祝日ハ、之ヲ祝ヒ奉ル日デゴザイマス。コレ等ノ日ニハ、何所ノ家デモ、国旗ヲ掲ゲマス。⁽¹⁴⁾

天皇の「御恩」や「大御心」の理解や、天長節にはどこの家でも国旗を掲げるという「内地」の慣習について説明されたことがわかる。また、この課の指導上の注意としては、「天皇陛下ノ御事ヲ教授スル際ニハ、特ニ言語態度ニ注意シテ、十分ニ敬意ヲ表セナケレバナラス」⁽¹⁵⁾ことや、「最敬礼ノ仕方ヲ教ヘテ、実習セシメル必要ガアル」⁽¹⁶⁾こと、「国旗ニ就イテモ説明シテ置ク必要ガアル」⁽¹⁷⁾ことなどが挙げられている。

国旗については、1930年の『普通学校修身書巻一』で「日ノマルノハタ」という課が新たに加わっている。そこには次のようにある。

日ノマルノハタ ハ ワガ クニ ノ コッキ デス。

一、シロジ ニ アカク 日ノマル ソメテ、アア、ウツクシヤ、ニホン ノ ハタ ハ。

二、アサ日 ノ ノボル イキオイ ミセテ、アア、イサマシヤ、ニホン ノ ハタ ハ。(18)

その他、「皇統」や「仁徳天皇」、「能久親王」、「明治天皇」、「皇太后陛下」、「皇后陛下」などの課が設けられ、その人徳や「御恩」、「内地」における崇拜ぶりが描かれている。

また、天照大神を主祭神とする「皇大神宮」の位置づけや特徴についても 1930 年代から独立した課が設けられ、以下のように説明されている。

皇祖天照大神をお祀り申してあるまつりたる皇大神宮は、三重県宇治山田市にあります。

神域は神路山のふもとの五十鈴川にそうてゐて、おのづから頭がさがります。

天皇陛下は大そう神宮を尊ばせられ、皇族の中から祭主を御任命あそばされます。…

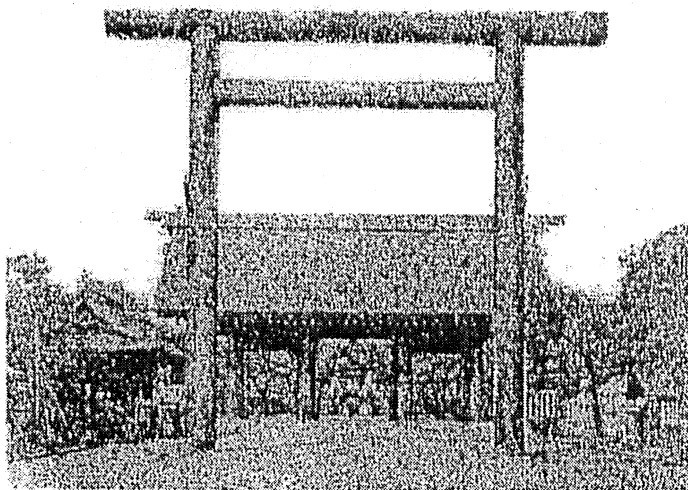
(中略) …我が国民もまた昔から厚く皇大神宮を敬ひ、一生に一度は参したいものだとねがはぬものはありません。このやうに上は皇室より下は人民に至るまで皇大神宮を敬ひ奉るのは、神宮の御祭神が皇祖であらせられ、神宮が国の鎮となられてゐるからであります。(19)

この「皇大神宮」の課は 1940 年代にも見られ、教科書の「編纂趣意」には、「朝鮮にはまだ神社雰囲気が到る処にできてゐないので、幼き者共に神宮参拝時の深き気持を偲ばせることがむづかしい。それで、できる丈状景記述を具体的に加へて置くことが望ましからうと思つて、文部省小学修身書の分より具体的紋景的に記述した」(20)とある。つまり、朝鮮の児童にとっては、実感の湧かない「内地」の事だからこそ、「紋景的」な記述が心がけられたということである。また、1940 年代に入ってから教科書に加えられたのが、「靖国神社」の課である。『初等修身書巻四』では、「靖国神社」について以下のように記されている。

東京の九段坂の上に、大きな青銅の鳥居が高く立つてゐます。その奥に、立派な社が見えます。それが靖国神社です。靖国神社には、君のために身をさへげた、たくさんの忠義な人人をおまつりしてあります…(中略)…私たちは、天皇陛下の深い御めぐみを思ひ、こゝにまつられた方々にならひ、身をさへげて、君国のためにつくさなければなりません(21)

ここでは、図 2 に示した写真が掲載され、「皇大神宮」と同様に以上のような「紋景的」な説明がされている。

図 2 修身教科書の「靖国神社」の写真



(出典：朝鮮総督府『初等修身書巻四』、1941 年、14 頁。)

このように、「皇大神宮」や「靖国神社」について「具体的敘景的に記述」することで、「内地」に実在する「神聖」な神宮・神社の様子や、「内地人」のそれらに対する意識・関わり方を朝鮮人児童に感じさせていたのである。

また、修身の教科書には、植民地期を通じて「内地」の「偉人」にまつわる説話も散見される。例えば、「謙虚」という單元においては、互いに謙り、相譲って他を称美する久阪玄瑞と高杉晋作が吉田松陰から高い評価を得たエピソードが扱われ⁽²²⁾、「友情」という單元においては、衣食にすら事欠くほどの窮境にありながら、友人に対する情誼を重んじる新井白石が⁽²³⁾、「德行」の單元では、中江藤樹が登場している⁽²⁴⁾。他にも「治産」、「修学」、「敬師」の課では伊能忠敬が出たり⁽²⁵⁾、二宮尊徳をモデルに「孝行」、「勤労」、「修学」、「貯蓄」、「公益」について説かれたり⁽²⁶⁾、「チウギ（忠義—山下註）」の課では乃木希典が登場している⁽²⁷⁾。このように、「内地」ではどのような人物が「偉人」として敬われてきたのかを朝鮮の児童に教える内容も多い。さらに、『普通学校修身書卷三』の諸言には、「内地人ノ例話ヲ授クルニハ、適宜、内地ノ事情ヲモ示シテ、能ク之ヲ理解セシムルヲ要ス」⁽²⁸⁾とあるように、単に人物に関する話を紹介するだけでなく、それに関連する「内地ノ事情」を理解させることが図られていた点も朝鮮における「内地」教育の特徴である。

また、修身教科書には、「内地」の名所に関する内容も確認できる。例えば、「奈良」という課においては、「内地」旅行をした朝鮮人児童の回想記として、次のような文章がある。

この夏、内地を旅行して、ほんとうに面白いと思ったのは奈良でした。

停車場を出て、三條通を東に行ったら南丸堂の前に出ました。其所の石だんの下に大きな牡鹿がねていて、其の角に赤とんぼがとまっていました。私はあまりに面白いので立ちどまりました。

奈良は何を見てもおちついた所です。千何百年か前に都のあった所だそうですが、寺を見ても、山を見てもすべて昔の事が思い出されます。

春日神社に向って一二町行ったあたりから、大鹿小鹿がぞろぞろあつまって来ました。

(…中略…) 人と鹿の此のむつましい有様は奈良の都で一番美しいものだろうと思いました。⁽²⁹⁾

これは、奈良の情景や雰囲気、教科書を読む子どもと同じ立場、つまり朝鮮人児童の目線で描かれている点に特徴があり、「内地」への関心や親近感を効果的に養おうというねらいがそこに潜在していたとも考えられる。これと同様の形式で、「京都」という課も設けられている。その内容は以下のとおりである。

冬休に叔父さんと内地を旅行しました。京都に着いた朝は霜が白くて寒うございました。停車場を出て烏丸通を北へ歩きました。

私は千年余りも都であつた京都をこうして歩くのが、何となく面白うございました。町並が正しく区画されて、東西の通りに六條・五條・三條などという名がありました。一時間余り歩いて御所の横に出ました。此所が昔の皇居だと聞いて、私はとうとうと思いました。御苑内をぬけて賀茂川ばたに出ました。川風は寒うございましたが、きれいな水がこおらずに流れているのを見て、内地は朝鮮よりもずっとあたゝかだと思いました。

(…中略…) 東山まわりの電車を祇園で下りて、丸山公園から清水寺に上りました。此所からは京都がほとんど一目に見えます。東・西本願寺・二條離宮などの大きな建物がことに目立っていました。(30)

これもやはり、朝鮮から「内地」への旅行記というかたちをとっている。京都を訪れた朝鮮の子どもが、歴史を感じて「とうとく」思ったことや、電車や建物、町並の区画の印象を記しており、実際に「内地」に行ったことのない朝鮮人児童もこの記述を通して「内地」旅行を追体験できるような内容となっている。ちなみに、こうした「内地」の名所についての内容が含まれたのは1920年代に入ってからである。「内地」旅行記というかたちをとるものではないが、他にも実際に「内地」を体感した子どもの内面が顕れているものがある。それは、以下の「手紙」の課における記述である。

此の前の土曜日には日光へ行つて、一晩泊りで見物しました。「日光を見ずに結構にいふな。」というふことは聞いて居りましたが、東照宮のりつばなのには実際おどろきました。大きな岩がそびえ、老松が茂つて居る間に、華嚴・裏見・霧降などの瀧がかゝつて居る美しさも、またたとへやうがありませんでした。青くすんだ中禅寺の湖水に、紅葉したあたりの山が影をうつしてゐる景色は、ことにすぐれて見えました。ひまがあつたら、もう一度行つて見たいと思つてゐます。(31)

これは、朝鮮の子どもが、東京にいる兄からもらった手紙の内容である。手紙には、「りつば」な東照宮や日光の「美しさ」に感動した様子が記されている。こうした内容に触れ、朝鮮人児童が実際にどう感じていたかということまでを詳らかにすることはできないが、「内地」の「りつば」な文化や歴史、名所の「美しさ」に関する朝鮮人児童のイメージは、自分自身と同じ立場である子どもの目線から描かれた「内地」像への接触や追体験によって形成されていた面があったといえる。

また、朝鮮の修身教科書独自のものとして特徴的なのは、「内地」のある地域と朝鮮のある地域を比較しながら紹介したものである。以下は、「日野と開城」という課の内容である。

日野は滋賀県蒲生郡にある町で、有名な近江商人は多く此所から出てゐる。町は小さくて、開城のやうににぎやかではないが、商業上では開城と甚だよく似てゐる。(…中略…) 開城商人は絹の着物を着ることをはぢる。日野商人もぜいたくなみなりを好まない。共に質素・儉約をたつとぶ氣風が強い。開城商人は殆ど朝鮮全道の商業に関係をもつてゐる。日野商人は遠く関東地方に支店を出して、商業にはげんでゐる。共に勤勉であり、機敏である。(32)

朝鮮人児童にとって比較的身近で実感の湧きやすい開城やその生活者を手がかりにし、「内地」の日野の様子や商人文化の特徴を理解するよう構成された内容である。先に見た京都や奈良といったいわゆる「内地」の名所だけでなく、日野のように「小さく」、「にぎやかでない」地方の様子も朝鮮に伝え教えられていたことがわかる。また、「内地農村だより」という課には、「こちらに来て、先づ目についたのは、こんもりと茂つた山のすがたでした。きれいな川の流れでした。立ちならぶかはらぶきの家でした。家のまはりには、かきや、みかんの木が植ゑてあり、堆肥はうづ高くつまれてありました。さすがもはん農村だと思ひました」(33)とあり、い

わゆる名所ではなく、素朴な、しかし「きれい」で、模範的な「内地」の農村の様子についても朝鮮人児童に触れさせている。こうしたものが取り上げられた背景には、1920年代からの「朝鮮ノ実情ニ鑑ミ農村文化ノ発達ヲ促スベキ資料ヲ増加スルコト」⁽³⁴⁾という方針があったのである。このように、「内地」の一地域や日常生活の一面が細かく描かれる一方で、朝鮮と「内地」との関係をマクロな視点から捉える内容も存在している。「我が国」という課においては、「主要なる設問」として「朝鮮と内地とは古からどんな関係をもつておりましたか」⁽³⁵⁾という問いがあるように、「内地」と朝鮮との関係性について古代、神話の段階から理解させようとしている。朝鮮総督府の「教科用図書編纂綱領」には、「日韓併合ノ精神ヲ理解セシメ内鮮融和ノ実ヲ挙ゲル為之ニ関連スル事項ニ付一層留意スルコト」⁽³⁶⁾という指導上の注意が記されている。朝鮮と「内地」の関係についての教育は、例えば以下のような課において行なわれている。次の引用は、朝鮮から「内地」へ船で渡った子どもが書いた手紙の内容という設定である。

目がさめて甲板に出ると、おとうさんが右手の小さい島を指して、「あれが沖の島だ。」とおっしゃいました。私は日本海海戦は、あの島の附近からはじまったのだらうと思ひました。中国や九州の山が、かすかに見え始めました。出入の汽船も三四隻見えて居ます。おとうさんが、「昔朝鮮や支那の文明が、此の海を渡って内地に流れ込んだが、今は内地の文明が、此の連絡船で朝鮮・支那に流れ出る。面白いものだ。」とおっしゃいました。⁽³⁷⁾

この課は「連絡船に乗った子の手紙」という題で、「内地」に関する様々な事柄を教えてくれる「おとうさん」が、「昔」は朝鮮から文明が「内地」に流れ込んだが、「今」はその逆であるということを子どもに説いている。教科書を見て学ぶ朝鮮人児童は、「おとうさん」のこうした説明から、朝鮮と「内地」の関係を理解していったのである。

以上見てきたように、朝鮮における修身教科書には、あらゆるかたちで「内地」に関する知見が盛り込まれていた。しかし、「外地」である朝鮮において、離れた「内地」のことを教科書のみで学ばせることは、決して容易なことではなかった。1932年、朝鮮総督府編修官の鎌塚扶は、朝鮮における「内地」教育の困難とその打開策について次のように述べている。

巻一の十八「テンノウヘイカ」が現代の実話材料の始めて、之は東京の地理的位置を了解させることが最も困難…（中略）…廻り遠い説明をしてゐるよりも自分の信ずる先生がそこに行つて見たことがあるといへば間違ひはない。それで九分通りの目的を達し得てゐる。…（中略）…或人は「天皇陛下」の項を授けるのに桐の小箱を持つて来てその中から美しい小石をつまみ出し「東京の宮城前にかゝつてゐる二重橋附近の広場にはこのやうな美しい小石が敷きつめてある。これは私が拝観しました時記念のために治つて来て大切にしまつてあるのです。」と説明したさうである。これだけで百千の語を費やしたよりもより実感的に二重橋前の光景を物語るに足る。⁽³⁸⁾

ここで問題点として指摘されているのは、東京や京都、奈良など「内地」のある地域についていくら言葉を尽くし、絵を以て説明しても、朝鮮に住む児童には実感が湧かず、その理解には限界があるということである。その上で、こうした問題に対する有効な手段として着目されているのが、教員の実体験である。教科書の説明よりも教員自身が「そこに行つて見たことが

あるといへば間違ひはない」し、そうすることで「九分通りの目的を達し得てゐる」というのである。朝鮮では、教員養成の段階で「内地」への修学旅行が行なわれていたが⁽³⁹⁾、その実施の背景に、こうした学校における教員の「内地」体験の有用性があったことを見落とすことができない。このように、教科書の中の「内地」だけでなく、教員自身に刻まれた「内地」の印象や経験の内容により、朝鮮人児童の「内地」イメージ形成が図られていたことも、朝鮮における「内地」教育の大きな特徴であったことがわかる。

おわりに

本稿では、植民地朝鮮における「内地」教育がどのような形で行なわれていたかということを検討課題とし、初等学校における修身教育の内容に重点を置いて論じてきた。

朝鮮における修身教育の内容は、「内地」のそれに準じたものではあったが、朝鮮総督府が朝鮮の「特殊事情」を考慮して編成した朝鮮独自の特徴を有するものであった。また、1938年以降は、いわゆる「皇民化教育」の強化・徹底に伴って授業時数がそれまでの週一時間から週二時間に増加され、国語や国史とともに学校教育の「中核」としての性格を強くした。

具体的な「内地」に関する教育内容について見ていくと、おもに天皇制やそれに関連する行事、神宮・神社の様子、人々の関わり方、「内地」の「偉人」や名所、商業都市、農村の様子、朝鮮と「内地」との関係についての課が散見され、それらの内容はそれぞれ、総督府が朝鮮人児童に描かせたい「内地」像の一端を窺わせるものであった。さらに、こうした「内地」教育において教科書の内容と同等以上に重視されたのは、教員の「内地」経験であった。つまり、教科書に描かれる「内地」と、教員の経験の中にある「内地」とにより、朝鮮人児童が「内地」に対するイメージを形成するという教育体制が築かれていたのである。

植民地朝鮮における「内地」教育の対象となったのは、本稿でおもな対象とした普通学校の朝鮮人児童だけではない。特に1930、40年代になると、いわゆる在朝日本人の2世や3世の「内地」離れが深刻化し、彼／彼女らへの「内地」教育も重要視されることとなる。朝鮮に住む「内地人」に対する「内地」教育は、朝鮮人児童に対するそれとは明らかに異質な性格も有するものである。こうした在朝日本人に対する「内地」教育の実態を明らかにすることが今後の課題であることを付言しておきたい。

(本稿は、平成20～21年度科学研究費補助金【特別研究員奨励費】[研究代表者：山下達也「植民地教員の存在様態に関する研究」、課題番号20・01886]によって行なわれた研究成果の一部である。)

【註】

- (1) 磯田一雄『「皇国のすがた」を追って』、皓星社、1999年。
- (2) 小沢有作「朝鮮における日本植民地教育の歴史」、旗田巍監修『日本は朝鮮で何を教えたか』、あゆみ出版、1987年、96頁。
- (3) 「併合」以前と「併合」後の修身教科書の連続・非連続を明らかにし、そこから総督府の教育理念がどう変化していたのかについて論じたものに、本間千景の「韓国「併合」前後の修身教科書にみる教育理念の変遷」(『朝鮮史研究会論文集』、No.40、朝鮮史研究会、2002年10月、277-309頁)がある。
- (4) 「普通学校規則」、1911年、第八条。
- (5) 長根禅提「普通学校修身書下学年の教材について」、『文教の朝鮮』、1925年10月号、62頁。
- (6) 朝鮮総督府『普通学校修身書卷一』、1918年、9頁。
- (7) 同上、13頁。
- (8) 同上、26頁。
- (9) 鎌塚扶「修身科質疑ニ対スル回答事項」、『文教の朝鮮』、1936年3月号、55頁。
- (10) 1938年以降は、「内地人」児童を対象とする小学校と朝鮮人児童を対象とする普通学校が制度的に統一され、ともに小学校となっている。
- (11) 吉田正男「国民科修身教科書の体系とその重点」、『文教の朝鮮』、1944年3月号、21-22頁。
- (12) 「修身教科書沿革考」、朝鮮総督府『教科書編集彙報』、第2集、1938年、6頁。
- (13) 朝鮮総督府『普通学校修身書卷一 教師用』、1923年、75頁。
- (14) 同上、75-77頁。
- (15) 同上、77-78頁。
- (16) 同上、78頁。
- (17) 同上。
- (18) 朝鮮総督府『普通学校修身書卷一』、1930年、26-27頁。
- (19) 朝鮮総督府『普通学校修身書卷五』、1934年、35-36頁。
- (20) 朝鮮総督府『教科書編輯彙報』、第5集、1940年3月、15頁。
- (21) 朝鮮総督府『初等修身書卷四』、1941年、14-17頁。
- (22) 同上、147-152頁。
- (23) 同上、153-158頁。
- (24) 同上、170-178頁。
- (25) 朝鮮総督府『普通学校修身書卷四』、1918年、41-45頁。
- (26) 朝鮮総督府『普通学校修身書卷三』、1918年、5-13頁。
- (27) 前掲『普通学校修身書卷一』、1930年、27頁。
- (28) 朝鮮総督府『普通学校修身書卷三』、1918年、諸言。

- (29) 朝鮮総督府『普通学校国語読本巻五』、1923年、93－97頁。
- (30) 朝鮮総督府『普通学校国語読本巻六』、1923年、44－48頁。
- (31) 朝鮮総督府『普通学校国語読本巻八』、1924年、14－15頁。
- (32) 同上、47－49頁。
- (33) 朝鮮総督府『初等修身書巻四』、1943年、16頁。
- (34) 朝鮮総督府「教科用図書編纂綱領」、1928年、第1号の乙。
- (35) 朝鮮総督府『普通学校修身書巻五 教師用』、1924年、14頁。
- (36) 前掲「教科用図書編纂綱領」。
- (37) 朝鮮総督府『普通学校国語読本巻七』、1923年、83－84頁。
- (38) 鎌塚扶「修身科各種教材取扱上の主眼点」、『文教の朝鮮』、1932年2月号、59－60頁。
- (39) 朝鮮の師範学校において「内地」への修学旅行が行なわれていたことについては、拙稿「植民地朝鮮の師範学校における「内地人」生徒」（『歴史学研究』、No.819、歴史学研究会、2006年10月、23－31頁）で言及している。

Education regarding the "Mainland"(Japan) in Colonial Korea

— Focusing on the "Shushin-ka" subject in elementary schools —

YAMASHITA Tatsuya

The aim of this article is to gain new knowledge about the process of formation of the "Mainland" (Japan) image in Colonial Korea. In this article I examine in particular the Shushin subject in elementary schools in colonial Korea.

Shushin in colonial Korea followed on the order of Shushin in the "Mainland", but also contained elements of original education that the Governor-General's office organized in consideration of Korean "particularity". In addition, after 1938, the number of lesson hours were increased with the reinforcement of "Kouminka kyoiku" ("education to become a good citizen of the Emperor"), and its character as "the core" of school education became strong alongside national language and national history.

Education contents about the "Mainland" in textbooks consisted of: the Emperor system of Japan, outlines of events, institutions, the manners of people, places of interest and commercial cities, farm villages of the "Mainland", and the relations between Korea and the "Mainland". These contents conveyed segments of "inland" images that the Governor-General's office wanted Korean children to envision. Furthermore, the "Mainland" experience of teachers held equal or greater importance in education regarding the "Mainland". In other words, the educational system for shaping the "Mainland" image of Korean children was formed by combining the "Mainland" portrayed in textbooks with the experience of the teacher.